

徐永祚と中式簿記の改良

Yong-Zuo Xu and Chinese Accounting Reform in the late1920s and early'30s

邵 藍 蘭

要 旨

清末民初、中国は西洋文明の導入に急ぎ、その多くの場合、「邦訳の漢訳への転訳」という形で、西洋の文明が日本を媒介して中国に伝わったのである。「debit/credit 複式簿記」もその例外ではなかった。しかし、西洋式簿記の受容過程において、2千年の歴史を有する中国固有の収支簿記法は、あまりにも根強く広く使われていたため、和製漢語「借方」・「貸方」を記帳記号とする西洋式複式簿記に対して、強い拒否反応を示した。本稿では、中式簿記が西洋式簿記に置きかえられていく長い歴史過程の中に、1920年代後半から1930年代前半までに起きた、徐永祚による中式簿記改良運動を扱い、徐の改良思想の形成過程と改良中式簿記の内容を整理し、明らかにする。

目 次

- 1 はじめに
- 2 中式簿記の欠点
- 3 中式簿記改良の時代背景
- 4 徐永祚の中式簿記改良思想の形成過程
- 5 改良中式簿記の内容
- 6 おわりに

1 はじめに

中国において、西洋式複式簿記法を紹介する最初の簿記書『連環帳譜』は、日本の『帳合之法』（福澤諭吉、明治6年、1873年）より32年遅れて、1905年（明治38年）に出版された。そしてアラビア数字、横書き、太陽暦、「借方」・「貸方」記帳記号の使用といった意味での西洋の複式簿記の真の姿を中国人に伝えた最初の簿記書『銀行簿記学』は、明治期に日本に留学した清国留学生謝霖・孟森によって1907年（明治40年）に出版された¹。

日本では、『帳合之法』について、福澤諭吉自身もいうごとく、「売れたれども、実地に用いて帳面を改革したる者は少なし」という状態で、「在来の商店で

は固有帳合法が守られ、洋式複式簿記の全面普及は大正末昭和初期（1920年代一邵）になる」（小倉、1979：681）のである。

一方中国でも日本と同じく、2千年の歴史を有する中国固有の収支簿記法があまりにも根強く、広く使われていたため、西洋式複式簿記への抵抗は並大抵ではなかった。「中国旧式の商工業事業主は、西洋の貸借会計について、理解できないだけでなく、興味もなかった（趙、1999）。『連環帳譜』を「読んだ中国人は果たして何人いるだろう」と後世の会計学者が嘆く（邵、2011）ほどであった。

1930年代に至り、「中国商工業の状況は、規模において中小企業が数の上で90%以上を占め、これらはなお中国式収支簿記法を用いていた」（山岡、1995：86）といわれている。そこで、1920年代後半から1930年代にかけて、1937年の日中戦争勃発まで、中国（主に上海）では、西洋式簿記及び会計学の研究者で会計士でもある徐永祚は、中式簿記の存在価値を見直し、中式簿記を基礎にし、西洋式簿記の原則原理を参考にしながら中式簿記を改良する思想を持ち始め、中式簿記改良運動のブームを引き起こした²。

この改良運動は民国時期という特殊な時代の出来

1 拙稿「中国における初期の簿記書」（2011年）を参照されたい。

2 改良の思想に対して、中式簿記を廃止し、全面的に西洋式簿記を導入する、と提唱する改革の思想も一方では存在する。近代中国会計における改良派と改革派との学術論争については、今後の研究課題とする。

事であるゆえに、新中国建国（1949年）後、取り上げられることはほとんどなかった³。また日本においては、1920年代から1940年代にかけて、日本の会計学会誌『会計』（日本会計研究学会一邵）に頻繁に登場する中国（当時、「支那」と称した一邵）の会計研究は、終戦と共に見られなくなり、徐の中式簿記改良運動を全面的に扱う論考はまだ見当たらないのが現状である。

本稿は当面、入手できる非常に限られた文献・資料⁴を手がかりにして、民国時代（特に1920-30年代）における中式簿記改良の時代的背景を検討し、徐による中式簿記改良思想の形成、改良の内容と意義を明らかにする。

2 中式簿記の欠点

1920-30年代の時期に限って言えば、中国固有の簿記法⁵に対する理論研究は皮肉にも日本人の手でとりあげられ、その先鞭をとったのは有本邦造であった。その後一層の理論的研究を深めた学者には戸田義郎⁶があった（小倉、1961）が、本稿では、1927年（昭和2年）4月、「上海東亜同文書院」⁷に赴任後、中国固有の簿記法などを日本に紹介し、1920-30年代当初徐とも親交のある有本の記述を依拠することにする。

有本の人物像については今後の調査研究に委ねるが、少なくとも現時点では、彼が1927年4月、会計学の教員として上海東亜同文書院に赴任し、上海滞在期間中に当時上海で知名度と影響力抜群の徐との親交があり、そして1941-43年において「台北州立台北商業学校」⁸の学長を務めたことは分っている。彼は1927年7月から1941年4月まで、日本の『会計』誌に30本以上の中国会計に関する論考を発表していた。また1930年に有本は『支那会計学研究』を題とする著作を大同書院から出版させ、それが恐ら

く日本における中国会計研究の最初の著書であろう⁹。中国人自身による民国時代の会計研究はほぼ未開拓の分野であるがゆえ、有本が残してくれた研究成果は、中国近代会計史研究の重要な資料になるであろうと、特に記しておきたい。

では1927年の時点で、一歩先に西洋式簿記を導入していた日本から来た有本の目に、後進の中国の簿記がどのように映ったのか、彼の記述（有本、1930：136-150）を見てみよう。

「支那固有の簿記を見るに、公会計には、収支清冊及四柱清冊の諸簿あり、私会計には流水及総清があり、更に結算に関する各種の書類がある」、流水簿には、「銀錢流水・貨源流水・批発流水・門市流水等があり、総清簿には、批発総清・貨源総清・行荘総清・雑項総清等があり、又結算に就きては、存核表・盈虧表及盤存表がある。ここに云う流水簿は、元来原始簿であるが、又複式簿記に於ける特別仕訳帳と考えこれに利用することもできるであろう、又各種の総清簿は複式簿記に於ける元帳と考えることが出来るであろう。又更に存核表・盈虧表及盤存表は夫々複式簿記に於ける貸借対照表・損益計算表及財産目録に該当するものと見て差支えないようである、又別に軋龍門と云う帳簿あり、これあたかも複式簿記に於いて作成する合計試算表に似て居る。かくの如く観察し来るときは、支那固有の会計にも相当の制度が存在して居ることが分かるであろう」と、当時の中国簿記に一応の評価を下した上で、有本は中国固有の会計の欠点について、会計原理上の欠点、会計方法上の欠点、そして会計観念上の欠点という3つの側面から論じた。

まず。会計原理上の欠点について、

(1) 現金を重視する不完全簿記であること。すなわち、支那固有の簿記は、現金を主体として考察し、その相手方の勘定を省略したのである。たとえば、

3 中国国内では民国経済史全般の研究はようやく近年になって行なわれるようになった。武漢大学出版社から民国経済思想研究叢書を出版しており、その中に『民国会計思想研究』（宋、2009）がある。

4 今後はさらなる原始史料の収集に努めたい。

5 中国固有の簿記法という場合、営業の種類、規模の大小、資本の多少、記簿者の主義等により、その記帳整理法は、それぞれ異なっている（有本、1930：5）。また「地方的に著しい特色があるため、……同列に断じ得ないものがある」（小倉、1961）という。本稿でいう中式簿記は1920-30年代頃、上海およびその附近に行なわれるものを指す。それには寧紹（寧波と紹興）系統のもの、蘇州系統のもの、杭州系統のものがあるといわれる（有本、1930：142）。

6 戸田義郎の中国簿記関連論考には「中国簿記の検討」（『支那研究』1934年）、「南支系中国簿記の研究」（『支那研究』1942年）、「中国簿記に於ける計算目的」（『国民経済雑誌』1951年）、「中国簿記における帳簿組織」（『国民経済雑誌』1952年）がある。

7 本校は1901年、日本が上海に設立した中国ビジネスのエキスパートを養成する学校であり、1939年12月には大学令によって東亜同文書院大学に昇格し、1945年8月、日本の敗戦に伴い、閉学となった。

8 本校は日本政府がビジネス人材を育成するために台北に設立した学校である。1917年設立時は「台湾総督府立商業学校」という名称で、その後民国政府時代、1921年に「台北州立商業学校」、1922年に「台北州立台北商業学校」に改称し、今日は「国立台北商業技術学院」となっている。

9 小樽商科大学名誉教授久野光朗先生が、1970年（本書出版後40年）に古本屋より本書を入手し、2010年（出版後80年）に、この本は筆者が持ったほうが生きるであろうと贈呈して下さったのである。ここで久野光朗先生に感謝と敬意を表したい。

営業費を支払うとすれば、金銭流水簿の支払欄に営業費若干元と記入し、洋式簿記の如く、借方営業費貸方現金と仕訳記帳しないのである。

(2) 対人を重視し、対物を軽視すること。

(3) 金銭会計を重視し、物品会計を軽視すること。

(4) 貸借の平均を求める機能はもたないこと。中国固有の簿記には、軋龍門という一冊の帳簿がある。この帳簿は収支平均するや否やを見る為に作成するのであって、其目的は複式簿記に於ける試算表とよく似て居るが、単に軋龍門のみにては到底複式簿記に於ける試算表の有する効用を發揮することはできない。

(5) 振替取引の記帳を重視しないこと。それは「現金の収支に重きを置き、現金を主体とし一方的の記入をなし、従って振替取引の如きに至って完全なる整理が行なわれて居ない」とみられる。

次に、会計方法上の欠点について以下の5点を取り上げられた。

(1) 帳簿組織が不完全であること。支那固有の会計に使用する帳簿を見ると、規模の大小、営業の種類、資本の大小などにより、相違あることはもとより、同一種類の営業、同一程度の資本、同一程度の規模の営業に於いて、すべて帳簿組織が一定し、各帳簿間に相互完全なる連絡があるかと云うと、決して完全なる連絡関係と認め得るものが少ない、寧ろ混乱して居ると云う方が適当であろう。かくの如くにして各種の会計主体に於ける帳簿の名称、種類等異なるものあるは勿論、其数に於いても著しき差異がある、更に、一冊の帳簿で数種の帳簿の用途を果して居るものがあるかと思えば、数冊の帳簿で一種の帳簿の用途しか果して居ないものがある。

(2) 記帳単位が紊乱であること。

(3) 値引きおよび割引は記帳しないこと。

(4) 記帳の縦書きは不便であること。西洋式簿記は左に借方、右に貸方として記帳するが、支那固有の簿記は上欄を取、下欄を付すなわち支出を書く欄として伝統的に定まっている。

(5) 記帳金額に文字を附記すること。たとえば \$1,853,800 を壹百八拾五萬參千八百元というように記したのである。

最後に、会計観念上の欠点について、

(1) 一般的に会計が軽視されること。一般の人はもちろんのことであるが商人であっても概して会計に対して無関心であり、比較的之を軽視しているように見受けられる。

(2) 損益計算を無視すること。たとえば「固定資産の減価につき一定の理論的組織的方法に基き計算上償却させるものはほとんど無い」。

(3) 監査に対する誤解が存在すること。一般の商人および非商人をして、会計監査は恥べきの事件、不幸中の不幸なる事件として考えられ、何人も監査を受けまた監査をなすことを欲しないという。

以上は1920-30年代の研究水準の下で指摘されたものである。

3 中式簿記改良の時代背景

周知のように、清末の洋務運動によって、西洋の生産技術が導入され、わずかではあるが中国の近代工業も発展し、それに伴って西洋の簿記や経営手法も中国に伝来した。とはいえ、西洋式簿記は、列強が中国で設立した工場、洋行、銀行、および不平等条約によって列強にコントロールされた中国の税関、塩務局、鉄道、郵政などの実務業界のみにおいて使用され、それらは、あくまでも局地的で、個別的であった。西洋式簿記法が書物の形で中国に紹介されたのは20世紀に入ってからのことであった。

すでに拙稿(邵, 2011)で考察したように、中国における最初の簿記書もしくは会計専門書は蔡錫勇の『連環帳譜』(1905年)である。本書は中式簿記の用語と中国風の例示を通じて西洋式複式簿記を中国に紹介したものである。不運にも本書は出版後、商工業界からまったく反応がなかった。会計界にも影響を与えることはなかった。

そして西洋式の帳簿、文字の横書き、アラビア数字と西暦、「借方」・「貸方」という和製漢語の記帳記号の使用、といった形の西洋の貸借複式簿記を中国人に紹介した最初の著書は謝霖・孟森の『銀行簿記学』(1907年)である。ところが中式の収支簿記に慣れた中国人にとって、特に和製漢語の「借方」・「貸方」が難解の極まりであったため、本書は出版されたものの、中国全土に広がるといったほどまでの普及には至らなかった¹⁰。

というのも、当時中国の「旧式商工業事業主は、西洋の貸借会計について、理解できないだけではなく、興味もなかった」(趙, 1999)。1930年代に至っても、ほとんどの中小企業はまだ中式簿記を使用していた。しかし商品経済の発展にともない、「伝統的中国式収支記帳法がはたして今後の商品経済の発展に寄与することが出来るか否か、また、収支簿記法を採るべきかどうかの論争が会計学界で起きた」(山

10 ただし、本書の出版はその後1920-30年代における中式簿記の改良運動に大きな影響を与えたことは否めない。

岡, 1995: 85)。徐による中式簿記改良の機運がまさにこうした時代的背景のもとで高まってきたのである。

徐はその後自身の著書『改良中式簿記概説』(1933年)の序論で次のように述べた。「中国では簿記に関する書物記載は四柱清冊のみであった。それは官庁簿記の方法で、民間もそれを援用し、もって今日の中国簿記法を形成する。四柱簿記法を考察してみると、実は西洋式簿記の現金簿に等しい。かりにそれを巧みに運用することができたら、それなりの効果があるであろう。残念ながら、中国では従来まで簿記の専門書がなく、個人の口頭による伝授のみであって、その結果、今日に至っても一定の組織体系といえるものがない。商業界では、(記帳方法の一部)派別が多く、法則も紊乱しており、人々からの非難を受けている。西洋式簿記伝来後、西洋式簿記と比べ、中式簿記はどうしても見劣りがする。そこで、会計学者は西洋式簿記を新式簿記と称し、極力にそれを普及すると主張する。彼らは、中式簿記を旧式簿記と称し、目にするにも値しないものとして見なし、それを廃棄すべきだと考えた。中国簿記法が軽視されて久しいことである。しかし、数十年来、銀行、鉄道、および新企業を除く、西洋式簿記を採用するものはわずかである。中式簿記は従前と変わらず広く使用されているのである。こう見ると、西洋式簿記は中式簿記の座を奪うことは決してできないことが分かり、中式簿記にもそれ自身の存在価値がある」という。

4 徐永祚の中式簿記改良思想の形成過程

まず徐永祚(1891-1959年)の人物像について、劉(2005: 143)、杜(2008: 237-8)、宋(2009: 156-7)の記述によると、徐は上海神州大学経済学科にて会計学、特に銀行会計学を体系的に習得し、1914年に卒業後母校で教鞭を執る。その後、時の中国銀行副総裁張公権¹¹の要請を受け、天津中国銀行に奉職する。1918-1919年に、中国銀行の推薦を受け、上海『銀行週報』の編集に携わり、当誌に会計研究コラムを開設し、会計改革・改良を巡る議論の場を提供したのである。1919-1921年、上海証券物品取引所からの要請を受け、取引所のための規程や会計制度を制定

した¹²。彼が制定した会計制度は当時の上海証券業界に大きな影響を与えた。1921年、徐は上海で「徐永祚会計士事務所」を創設し、会計士業務に従事し始めた¹³。一方では、徐は神州大学、復旦大学、上海中華工商専科学学校などで教鞭をとり、会計学、上級会計学および監査学などを教えていた。

では当初「熱心なる洋式簿記及会計学の研究者」(有本, 1930: 57)であった徐が、西洋式簿記の全面採用から改良中式簿記の普及に転向した、その思想形成はどういったものであったのか、そのことを劉(2005: 143-5)と郭(2009)の記述に沿って辿ってみる。徐の思想形成を4つの段階に分けることができる。

(1) 西洋式簿記の全面的な採用を主張した第1の段階である。

徐が中式簿記に関心を寄せ始めたのは『銀行週報』に奉職していた1918年か1919年の頃であった。それまでの彼の簿記に関する知識は、西洋の複式簿記およびその記帳原理であった。中国で一般に行われる在来の簿記およびその記帳法に関して、彼の知識は皆無と言ってよいほどであった。彼は、中式簿記が顛倒紊乱、支離滅裂であって、ただの単式簿記にすぎず、まったく研究する価値がない、と思っていた。それゆえ、彼は中式簿記を完全に廃棄し、代わりに西洋式簿記を全面的に採用することを主張していた。

(2) 西洋式複式簿記の原理と内容だけを採用し、形式的な部分は中式簿記の様式を援用する。これは第2段階の主張である。

1922年から1923年にかけて、徐は会計士事務所での実務経験を通して、西洋式簿記は一般の人々になかなか理解してもらえないことが分った。完全に西洋式の模倣にすると、結局のところは不都合も生じるであろう。なぜならば、西洋式簿記に移行するとなると、帳簿や筆墨も舶来品に頼らざるを得ず、それらの値段が非常に高価なので、決して提唱すべき改良の道ではないと徐は考えた。さらに徐を最も感慨深く感じさせたのは、ある案件の調査報告書を裁判所に提出したところ、裁判官は帳簿のアラビア数字が読み慣れないという理由で、報告書の作り直しを要求してきたという出来事であった。

11 張公権(1889-1979)は、1906年から慶応大学経済学部留学し、途中学費が続かず、1909年に帰国を余儀なくされた。彼はその後中国銀行界の基礎を作った人物として、「中国近代銀行の父」といわれている。

12 有本(1930: 153)によれば、当時中国の取引所は日本の取引所に倣い設立されたものであって、すべての面において日本に模倣するのが便利であったため、取引所の会計制度も日本の帳簿組織に基づき、その会計規則・帳簿様式等を制定したのである。有本は中国における取引所簿記は、銀行業・鉄道業の簿記に次ぎ完全なるものとなっていると評した。

13 謝霖は中国において初めて会計士資格を取得した人であるが、資格取得後直ちに開業をしなかったため、実質上、徐永祚は中国において公認会計士業務に従事する最初の人物となった。

こうした事情のもとで、徐は、西洋式簿記に中式簿記の形式を取り入れることを考えるようになった。たとえば、西洋式簿記の横書きを縦書きに、ペンとインクを筆に、アラビア数字を漢数字に変えるという方法であった。しかし、この方法でも、「記帳原理と記帳方法が完全に西洋式の模倣であったため、一般の人々が習得できるものではない」、ついに「商工各業界に普及させることはできなかった」。

(3) 中式収支簿記法の存在価値を再認識しその保存を主張した。ここから徐の中式簿記改良思想が初歩的に形成し、第3の段階とする。

1924年から1926年にかけて、徐は商工業界との広範囲な交流、および中式簿記採用企業への調査研究を経て、彼は中式簿記に対する見方が変わった。「中式簿記は完全に無組織ではなく、記帳方法も完全に不合理ではない。欠点は不統一にある。中式簿記について、その形式を維持する必要があるのみならず、実質上にも保存する価値がある。さらに中式簿記が広範囲にわたって使用され、歴史も長く、その強い影響力と確固たる基盤は決して西洋式簿記がそれを取って代われるものではない。もちろん、欠点も多く、改良しなければならない」と徐は述べた。

したがってこの時点では、徐は中式収支簿記法を保存しつつ改良を加えることを主張した。改良中式簿記を普及しやすくするために、徐はその改良を勘定の分類や帳簿組織などの側面に限定し、記帳の数字や帳簿様式について特に決めないことにした。ところが、記帳の数字が漢数字をそのまま使用すると多くのスペースを取る。また、旧来の縦式帳簿だと多欄式仕訳帳を設置できず、それゆえ、西洋式簿記の総括記帳法を模倣することができない。徐は「中式簿記は収支項目の比較的に少ない事業者にのみ適用できる」と認めた。

(4) 中式簿記改良の思想が比較的に成熟した第4の段階である。

1929年から1934年にかけて、徐は改良方案を確立し、さらに改良方案の中にある3つの発見を実務で試験的に実施させた。その3つの発見とは、①分割仕訳帳法を採用することによって、中式簿記の帳簿組織を改良した。すなわち、「中式帳簿では中国語での縦書きになっており、その縦が長くなりがちで、多欄式仕訳帳を設置するのに不向きである。しかし、

分割仕訳帳法を利用することで、多欄式仕訳帳に取って代わることができる。したがって中式簿記は分割仕訳帳法を利用することによって、その帳簿組織に変化を持たせることができる」という。②総括記帳法を採用することである。すなわち、各仕訳帳をもって日計表を作成し、日々の取引を日計表で総括することによって、転記と決算手続きの簡便化を図る。よって記帳の業務から多くの労力と費用を節約することができる。③四柱決算表の採用をもって、西洋式簿記の貸借平均の原理による決算法に取って代わる。すなわち各日記帳および騰清帳（総勘定元帳）に基づき毎日、毎月もしくは毎年の決算表を作成し、これによって各期間の記帳と計算に誤りがないうかを検証することができ、これは西洋式簿記の平均試算表よりも効果がある」という考えである¹⁴。

以上のような思想形成の変遷を経て、徐は1933年、30-40種類の標準帳簿様式を設計し、製作・発売させた。また同年1月、『会計雑誌』を創刊し、人々の改良中式簿記に対する関心を喚起し、そこから「改良中式会計問題」をめぐる討論を展開していこうと考えたのである。同年12月、徐の著作『改良中式簿記概説』¹⁵が出版され、これをもって改良中式簿記方案一式を公にした。

この改良方案の発表後、上海市商会は早速支持する書信を公表した。当該商会は一方では、徐を招いた改良中式簿記の講演会を行い、もう一方では改良中式帳簿の展覧会を開催した。こうした活動を受け、中式簿記改良の運動が上海で徐々に展開されていった。その後、徐はさらに現代でいうラジオ講座を利用して、全上海市に向けた改良中式簿記の普及に関する宣伝講話を行なった。中国計政学会、全国商会联合会、および各界の社会名士も続々と賛同の意を表した。上海『申報』は改良中式簿記を紹介する特別号を発行し、新聞社各誌も改良中式簿記に関するニュースを転載し、改良運動はピークを迎えた。

1934年1月、『会計雑誌』は「改良中式簿記特別号」として発行され、改良中式簿記の基本理論と方法を紹介したり、その優越性を宣伝したりして、採用する中小企業が日に日に増えていた。1935年、『改良中式簿記実例』（徐永祚著）一書の刊行によって、改良中式簿記はさらに多くの企業で試行されるようになった。

14 小倉（1961）は四柱結冊という基本的演算形式が「簿記という体系的計算原理の構造にまで展開されはしなかった」といい、それは「差引残高」の形で結果を求めるのみであって、差額をうめ合わせて二面を平均せしめるという西洋の「平衡残高」とは同列に論じられないと評していた。

15 『改良中式簿記概説』は、中国において体系的に収支簿記法を論述した最初の会計専門書であると評され、立信會計出版社の会計經典叢書シリーズの一冊としても収録されている。

しかし、1937年に日中戦争が勃発し、上海陥落後、多くの企業が内地に遷移してゆき、徐永祚会計士事務所も業務停止状態に陥り、『会計雑誌』も停刊になり、中式簿記改良運動が幕引きとなった。

5 改良中式簿記の内容

徐の改良運動は商業会計の改良に重点をおいた。当時、銀行、鉄道、取引所に関する簿記がすでに西洋式簿記に改良され、「完全なるものとなった」（有本、1930：153）。官庁会計と工業会計も西洋式への改良が進められていった。まだ中式簿記を使用しており、西洋式への改良を要するものは、商事会社の会計、農業会計および家事会計等であった。

そこで、徐は商業会計の改良を自身の課題に課した。なぜならば「商業だけはその状況が複雑」であり、「中式商業簿記が最も広く普及しており、改良すべきところも最も多い」（徐、1933 a）からである。

では、徐の中式簿記改良の思想はどういったものであろうか。徐の改良思想の道筋は、西洋式複式簿記の原理原則を採用しつつ、中国人に馴染みよい方法、すなわち中式簿記法の中に複式簿記と一致した理論および方法を踏襲するといったものである。『改良中式簿記概説』の「改良大綱」では、「整然かつ明瞭な会計を求めるなら、新式会計と複式簿記の原理原則を採用しなければならない。これは改良方案において変えてはいけない宗旨である。しかし、中式簿記法の中に複式簿記法と一致する理論や効用について、それらを解き明かした上で援用する」と徐の基本姿勢が明示された。

改良中式簿記の具体的内容は以下のとおりである¹⁶。

(1) すべての収支は証憑書を取得しなければならず、それを記帳の証拠とし、記帳伝票とも称する。記帳伝票は入金伝票、出金伝票、振替伝票の三種類に分けるが、この記帳伝票をもってこれまでの草流に取って代わり、さらに記帳伝票に基づき日記帳を記帳したことにより、従来までの「三帳」体系¹⁷を改良した。

(2) 西洋式簿記における勘定の分類方法を模倣して、中式簿記の勘定に対して分類を行った。すなわち資産負債勘定に属する勘定科目と損失利益勘定に

属する勘定科目に区別・分類した。

さらに徐は商企業の事業規模や事業内容に基づき、5種類の帳簿組織を考案した。まず帳簿を主要簿と補助簿に分け、主要簿は日記簿（原始簿）と騰清簿（転記簿）から構成される。決算表には西洋式の資産負債表、損益計算書、および財産目録を設けた。

(3) 帳簿記録の方法について、まず記帳伝票に拠って日記簿に記録し、現金収支に関するものは現金の相手勘定にのみ記帳し、その収支の差をもって現金残高を示す。転記項目は現金として見なし、名目上の収入と名目上の支出として処理し、「有収有支、収支相等」（「収」あれば必ず「支」あり、収支が等しい）ということになる。日記簿記録の繁簡により、それらを日ごと、旬ごと、または月ごとに騰清簿（元帳）に転記し、転記する時、収入方は「収」に、支出方は「支」に記入する。現金日記簿の転記だけは逆のほうに記入する。すなわち、現金日記簿の「収方」を騰清簿（元帳）の「支方」に転記し、またはその逆である。

(4) 改良中式簿記の決算方法は四柱決算法を援用した。すなわち各帳簿について、旧管（期首有高）、新収（当期収入）、開除（当期支出）、実在（期末有高）の4項目に分け各帳簿を締め切り、「日計表」、「月計表」、「差存表」（棚卸表）などを作成する。

(5) 決算について、期末月計表の資産負債各勘定科目の残高と「差存表」の有高に基づき、資産負債表を作成し、本表における負債が資産を超過した場合、当期損失とする。逆の場合は当期利益とする。また、期末月計算表における損失・利益勘定の残高と「差存表」の有高に基づき、損益表を作成する。本表における収益が損失より多い場合、当期利益となり、逆の場合は当期損失となる。

かくして、徐は中式簿記を改良する際、西洋式複式簿記から取り入れたものとしては、①複式記帳法、②記帳伝票制、③西洋式の勘定科目の分類法、④従来の「結冊」に取って代わり資産負債表と損益計算書および財産目録の採用、⑤帳簿を主要簿と補助簿に分けることである。

一方、中式簿記特有の慣習を踏襲したものとしては、①現金収支記帳法¹⁸ ②上欄は「収」、下欄は「支」

16 この部分は徐の『改良中式簿記概説』を参照し、また劉（2005：145-7）に負うところも多い。

17 「三帳」体系の三帳とは草流、流水帳、総清簿である。

18 中式簿記の「収・付」（「付」は「支出」の「支」という意味である）は、現金を主体とするが、複式簿記の「借・貸」は、勘定科目を主とする。表現対象がちょうど逆になっている。これはあくまでも中国と西洋間における記帳方法を考案する際の考え方による違いにすぎず、優劣の問題ではない。思うには、中式の「収・付」は反って西洋の「借・貸」より分かりやすい。我々は「借・貸」は「収・付」とは逆であることが分かれば、形式上の改革を行なう必要がない。したがって、中式簿記の現金式収支の記帳方法をそのまま踏襲するというのは徐の考えである。

の帳簿様式¹⁹、③「四柱決算法」、④会計数字体、数碼字の使用を推奨²⁰、⑤転記を表示する「過」或いは「入」など印章の使用、⑥勘定科目や帳簿の慣習的な名称、⑦伝統的な方法で資産負債表および損益計算表の損益を計算する、といったことであった。

6 おわりに

清末民初、日本を媒介して西洋式複式簿記が中国に伝播した。しかし、2千年の歴史を有する中国固有の収支簿記法はあまりにも根強く、1920-30年代に至っても90%以上の商工企業は中式簿記を使用していた。ともあれ、西洋式簿記導入機運の高まり、また商品経済の発展に伴い、伝統的の中式簿記がその変革を迫られた。

その際、二つの対応方法が考えられた。ひとつは「改良」、すなわち西洋式簿記の先進的な理論を吸収しながら、中式簿記の伝統をも踏襲する方法である。もうひとつは「改革」、すなわち中式簿記を廃棄し、全面的に西洋式簿記を導入する急進的な方法である。徐は「改良」の道を選択した。

徐の改良中式簿記は、旧式の記帳担当者や商工業者に広く受け入れられ、彼らの直面する焦眉の急を解決した。徐は当時の国情に最も適し、抵抗が最も小さく、最も成功しやすい方法で、中国簿記を西洋式複式簿記に導いたのである。

文化史的見地から、徐の改良は当時の社会的、文化的、経済的、政治的情况のもとでは賢明な選択であったといえる。「簿記は一社会科学として、……各国の歴史的風土・慣習を背景としつつ、その時、その土地の社会にとって適用可能でなければならないことを原則とすべきである」という徐の言葉は、欧米主導のIFRS時代の今日においてもその意味を失っていない。

参考文献

日本語

- 有本邦造 (1930) 『支那会計学研究』大同書院
 小倉栄一郎 (1961) 「日中国有簿記法の関係」『彦根論叢』第83・84号
 小倉栄一郎 (1979) 「『帳合之法』」番場嘉一郎編『新版 会計学大辞典』中央経済社所収

- 邵 藍蘭 (2011) 「中国における初期の簿記書」『経営論集』No.3, 札幌学院大学
 西所正道 (2001) 『上海東亜同文書院 風雲録 日中共存を追い続けた五〇〇〇人のエリートたち』角川書店
 山岡由佳 (許紫芬) (1995) 『長崎華商経営の史的的研究 — 近代中国商人の経営と帳簿 —』ミネルヴァ書房

中国語

- 杜恂誠 (2008) 『近代中国鑑証類仲介業研究 — 上海的注册会计师』上海财经大学出版社
 郭道陽 (2009) 「『前言』」『改良中式簿記概説』(徐永祚著, 立信會計出版会社, 復刻版, 2009年, 所収)
 劉常青 (2005) 『中国会計思想發展史』西南财经大学出版社
 宋麗智 (2009) 『民国会計思想研究』武漢大学出版社
 汪一凡 (2009) 『改良現代会計方案: 科学化的探索』中国財政經濟出版社
 徐永祚 (1933) 『改良中式簿記概説』(立信會計出版会社, 復刻版, 2009年)
 徐永祚 (1933 a) 「改良中式商業簿記方案」『會計雜誌』1933年第2卷第1期
 趙友良 (1999) 「漫談會計發展史和會計思想史」『財會通訊』1999年第2期

(しゃお らんらん 財務会計論)

19 中式簿記は上に収, 下に付を記入しており, これは西洋式簿記の左に「借」, 右に「貸」を記入することと同様である(この認識に対して, 有本 (1930: 146) は, 「これはある種の勘定については, そのように説明し得るも, 全部の勘定に収付は借貸に該当しているとは断言できない」と指摘した。) ために, あえて西洋式の「借」・「貸」に変える必要がなく, 改良方案において従来どおりに「上に収, 下に付」と縦書きにする。

20 漢数字での記帳は紙面を取り, 多欄式仕訳帳が採用できない欠点はある。蘇州碼字に換え, アラビア数字による記帳とは変わらないという。